

これからの計画系教育はどうあるべきか

—計画系教育の変革のビジョン—

日 時：2002 年 8 月 3 日(土) 13:15～17:00

会 場：金沢工業大学 17 号館 401 教室

世界に類を見ないほどの多数の計画系研究者と、彼らによる膨大な数の論文が示す充実した研究成果の蓄積がわが国にはある。これは 20 世紀の諸科学や技術に基礎をおく、建築学の体系が確立されつつあることを世界に誇るものである。

しかしその一方では、訪日した欧米の建築学科の教師が驚く、学生数に比べてあまりにも狭い設計演習室や、少ない教官や演習時間の問題がある。また熱心に設計演習に取り組む学生には費やした時間の割には極端に少ない単位数の問題もある。さらに日本全体で約 170 校というとても多い学校の数と、実際に設計活動に参加する卒業生の少なさは、日本の大学が多様な分野に卒業生を送り出しているという別の顔を示すものでもある。町には世界的に優れた建築作品が多いが、その一方で先進諸国に比べてあまりにも見苦しい都市景観や多くの違法建築がある。これは多くの建築関係者の低い職能意識を示す問題でもある。

もしも、ある国が新たな建築教育制度やそれに続く建築家資格制度を検討しているとき、日本の制度と例えばアメリカの制度を比較して、どのように判断するであろうか。これは留学生受入れの問題でもある。

日本技術者教育認定制度(JABEE)の建築分野の審査基準が建築学会で議論され始めたころ、ちょうど世界建築家連合(UIA)による建築家教育国際審査基準の議論が起こり、それに対応する必要性から計画系では、これからの教育のあるべき姿が緊急の問題となった。

計画系教育は UIA の規準をにらみ、優れた建築家を中心にした集団に任すべきであるとする意見や、従来の通り、わが国の特徴を継承した教育を継続すべきであるなどといった多数の意見が噴出している。

そこで当研究協議会は、計画系を構成する建築

計画、都市計画、歴史・意匠、農村計画の諸委員会が一同に会し、この問題のビジョンを討議した。以下に、協議会で行われた討議の概要を記す。

司会の服部孝生(千葉大学/建築計画委員長)の開会挨拶に引き続き、副司会の岡崎甚幸(京都大学)が趣旨説明を行った。すなわち UIA の教育認定が受けられないと留学生の数が減っていくことが予想されること、UIA が最近、日本のように建築系の大学数が多い国に対しては、大学個別ではなく国別に認定すると言いだめたこと、そうすると JABEE のサブプログラムの一つである「設計・計画」の審査を各大学がクリアすることが UIA の認定につながる可能性が高いことを説明した。一方 UIA の審査基準は 5 年制、半数以上を学生と教師の対話型の設計演習とすることを掲げているので、設計教育以外の計画系教育をどう位置付けられるのかをはっきりさせることが、大変重要であることなどを指摘し、各パネリストの意見を聞いた。

柏原士郎(大阪大学/建築計画)は、計画教育とデザイン教育の関係をどう考えるかが主題であること、建築計画は建築の価値を考える学問であり、最適値を求めるものではないことを述べた。また、これまでの日本の計画系教育が間違っていなかったこと、「変革」の背景にあるグローバリズムの考えが間違っていること、大学はビジネススクールではないこと、発注者サイドの計画専門家の役割が重要であること等を指摘し、結論として、国際的な動きに右往左往することなく日本型の教育で国際化に対応させるべきであるとの見解を述べた。

北原理雄(千葉大学/都市計画)は、建築の領域における都市計画は、人間の側から都市空間を考えている点が土木や造園との大きな違いであること、単体としての建築と都市空間や都市環境と

の関係性やプロセスを理解し調整できる人材を育てたいこと、座学だけでなく現場に出てコラボレーションをしながらの教育場面をもっと準備する必要性を論じた。また JABEE に対しては、都市計画はローカルなものであり、国際基準の中に押し込めないほうが良い旨を述べた。

重村 力（神戸大学 / 農村計画）は、まず「建築学は設計科学であり認識科学ではない」こと、農村計画はフィールドを重視すること、サステナブルな環境と社会にどう貢献できるかという建築の設計科学をつくることの必要性を述べたうえで、日本の現代建築文化の底辺の水準が低すぎるのは、日本の資格制度や教育制度が悪いからではないか、日本の一級建築士制度の虚構性を引き剥がして反省し、本当に役立つ制度は何なのかを考えないという教育の仕組みができないとの問題を提起した。また、アメリカや中国で実施した「スタジオ教育」の経験をふまえて、6 年間の教育の中ではスタジオ教育を主軸にし、講義・演習・実験・フィールド研修がそれを支え、さらに設計監理インターン制度を組み合わせる構想を示した。

羽生修二（東海大学 / 歴史・意匠）は、地球環境問題や都市周辺環境との関係、住民との問題等により、ストックとしての建築、リサイクルが重要になってきたため、残す側（歴史家）と壊す側（設計者）の間にあった溝がどんどん狭まっているなかで、設計教育の新しい姿が見えてくるのではないかという期待を持つ一方で、既存の建築をファッションのような形で再生させることには待ったをかけなければならないという考えを示した。最後に、長年愛された建築には、新しい建築とは違った訴える力があること、建築を愛する心が自然と建築のすばらしい評価につながるという思いを述べた。

休憩の後、服部孝生が協議会資料をもとに UIA と JABEE の関連、教育制度改革の経緯説明と現状報告を行った。これに続いて最後に設計教育の立場から意見が述べられた。

伊東豊雄（建築家 / 設計）は、最近の若い人には建築が社会の中での存在であるという自覚がなく、設計にリアリティがないこと、それは自分自身が社会の中の一人であることの自覚がないのとパラ

レルであり、彼らとのコミュニケーションが成立しないことへの憂いを述べた。また、日本の公共建築の設計においては、近代建築を成立させてきた三つの要件に象徴される明快で客観的、合理性を求める建築が完璧に支配していること、現在は従来の空間区分が曖昧になっており、その結果として建築のタイポロジーも曖昧になっていること、大学に対しては話しながら何かをつくる学生を送り出すことに最大の興味があることを述べた。

以上の発言を受けて、さらに各パネリストから以下の意見が述べられた。学生のコミュニケーション能力の低下に対する賛意（羽生）スタジオ教育の重要性の強調（重村）ワークショップ型演習の有効性と限界（北原）いい建築とは何かを示しうる中立的な唯一の組織が建築学会ではないか（柏原）発注者と建築家と住民の三者の間を取り持つ計画学者の役割への期待（伊東）が述べられた。

またフロアーから、建築業界の採用数は減っているが、計画系が進出できる分野はたくさんある（榎原 潤 / JABEE 審査員、清水建設）建築士制度の見直しの問題と、建築基準法第 1 条にある「最低基準を定める」の一文が憲法第 29 条（財産権の保障）の関係で改正されなかった事実の公表（村尾成文 / JIA 前会長、日本設計）計画学に対する無理解や誤解、建築教育がかかえる諸問題の指摘、JABEE や UIA にこのまま同調することは日本の建築教育を危険な方向に持っていくという危機感（鈴木成文 / 神戸芸工大前学長）等々の討論が繰り広げられた。

以上を要するに、現場でのコラボレーション、スタジオ教育、インターン制度といった総合的、実践的教育とコミュニケーション能力の育成の必要性が多くのパネリストから提示された。これに対して建築計画学に対してはその学術的、社会的役割の重要性が指摘された。また、都市計画はその地域性から国際的規準の作成には適さないとの意見が出された。結局、具体的な教育体制の討論までする時間はなく、次回の課題となった。また、一級建築士制度に対する厳しい問題提起がなされたことを付記する。

（文責：岡崎甚幸，吉村英祐）